

ヨーロッパにおける剣道の実態と初心者指導

The Realities of Kendo and Beginner's Direction in Europe

杉山重利*, 太田昌孝*, 氏家道男*, 福ヶ迫善彦**

Shigetoshi SUGIYAMA *, Masataka OOTA *
Michio UJIIE * and Yoshihiko FUKUGASAKO **

I. はじめに

わが国の文化として生み出された剣道は、国内の愛好者数が減少傾向にあるという問題を抱えている。一方、諸外国に目を向けると愛好者が増加傾向にあり、とりわけヨーロッパでは、国際剣道連盟（以下、「IKF」とする）への加盟国44ヶ国中25ヶ国に及んでいる。また、IKFには加盟していないが、旧ロシア圏ではウクライナ、バルト三国のエストニア、旧ユーゴスラビアでは、スロベニア、クロアチア、モンテネグロなどにおいても剣道が行なわれ、更なる加盟が期待されている。太田ら（2002）によると、剣道の普及過程は大きく3つに分けられる。それは、①移民とともに定着したタイプ（ハワイ、ブラジル、アメリカ西海岸など）、②戦前の日本統治下で芽生え定着したタイプ（韓国、台湾など）、③第二次大戦後に剣道が芽生えて定着したタイプ（ヨーロッパ、オセアニア、東南アジアなど）である。①②は比較的日本系またはアジア系社会の中で、③では剣道との最初の接点はさまざまであるが、剣道に興味を示し、デモンストレーションや全日本剣道連盟（以下、「全剣連」とする）の短期巡回講習会などをきっかけに芽生え、青年海外協力隊といった長期の日本人指導員や在留邦人で剣道経験者の指導、

また外国人剣道愛好者自身の訪日経験などを重ねていくうちに次第に広がっていったものである（太田ら、2002）。このようにヨーロッパでは、剣道が草の根的に広がりを見せ、着実に定着しつつあり、普及過程からも剣道のさらなる普及の重要な拠点となることが予想される。

しかしながら、筆者らが本研究の調査を行なうためにハンガリー剣道連盟を訪れた際（2005年4月21日）、ヨーロッパの剣道界にとって衝撃的な情報が舞い込んだ。それは、IKFが4月20日、ベルリンで開催されたGeneral Association of International Sports Federations（以下、「GAISF」とする）年次総会において加盟に必要な賛成票を得ることができなかったというものであった。このGAISFは、日本語で国際競技団体連合といわれ、IOC（国際オリンピック委員会）と密接な関係にある国際スポーツ機構のひとつである。また、GAISFにはFIFA（国際サッカー連盟）やFIBA（国際バスケットボール連盟）といった97連盟が加盟し、国際総合競技大会の主催団体である国際ワールドゲームズ協会、国際パラリンピック委員会、国際冬季オリンピック競技団体連合なども関連会員として加盟している。このようなGAISFにIKFの加盟申請は棄却されたのである。上記のGAISF年次総会において、加盟申請をした

* 国士舘大学体育学部（Faculty of Physical Education, Kokushikan University）

** 愛知教育大学教育学部（Faculty of Education, Aichi University of Education）

のは剣道のほかに、クロスボウ、ドラゴンボート、キックボクシング、ムエタイ、プラクティカルシューティングの5団体であった。いずれの団体も加盟に必要な条件（理事会の承認）は満たされていた。しかし、剣道のみならず6つの団体は加盟を否決された。加盟団体として出席していた世界フライングディスク連盟理事の師岡氏は「剣道は賛成35票、反対24票、棄権7票、まさか剣道が落ちるとは思わなかったので驚きました。棄権に回することはあり得るのですがこれだけの反対票は決して少ない数字ではありません」と述べている（剣日調査局レポート、2005）。

ではなぜIKFはGAISFに加盟しなければならなかったのか。それはヨーロッパ剣道界からの強い要請があったからである。もうひとつは国際的な統括団体として認められる必要性があったからである。つまり、ヨーロッパの剣道愛好者が活動を続けるためには、GAISFに加盟する必要性があったのである。

そこで本研究は、ヨーロッパにおける剣道の活動状況を明らかにするとともに、有段者で指導者としての立場にある愛好者の意識調査を行なった。これにより、IKFがGAISFに加盟する必要性と剣道の国際的普及について示唆を与えられると考えた。

II. ヨーロッパ剣道選手権大会

2005年4月15日から17日にかけて、第20回ヨーロッパ剣道選手権大会（20TH European Kendo Championships Berne Switzerland）がスイス（ベルン）において開催された。大会には、29の参加国から100人以上が出場し、その技を競い合った。大会では、男女別国対抗団体戦、個人戦、そしてジュニア個人戦が行なわれた。写真1・2・3にあるように、大会に出場した関係者はもちろんのこと、各国から多くの応援者や観戦者が訪れ、一戦一戦に声援を送り歓喜していた。その大会の雰囲気は、日本で行なわれる多くの大会を

思わせるもので、選手が繰り出す技に息を呑むものであった。また大会中、全剣連から派遣された浅野氏と佐藤氏によるデモンストレーションや昇段審査が行なわれた（写真4）。昇段審査の結果は表1のとおりであり、多くの愛好者が稽古の成果を披露した。大会期間中多くの地域住民が観戦していたが、それはベルン駅構内やバス停、飲食店等にポスターやパンフレットを掲示し、幅広く広告やPRを行なっていたためと考えられる（写真5・6）。パンフレットの中には、剣道の魅力や試合の方法など、一般観戦者に対する地道な普及活動が見受けられた。また、スイスのテレビ局関係者が取材に来ていたことからスイスの住民にとって興味を引くイベントであったのではと思われる。さらには、日本から剣道用具を取り扱う企業が参加しており、大会中選手の竹刀や防具等のメンテナンスを行っていた（写真7）。このように、ヨーロッパの剣道愛好者はもちろんのこと、ヨーロッパ剣道連盟や全剣連、在留邦人らによって大会は成功裏に終了した。

III. ハンガリー剣道連盟の活動状況

ヨーロッパ剣道連盟がGAISF加盟を提案した理由の第一は、ヨーロッパ剣道連盟に所属するいくつかの国において、IKFがGAISFに加盟することによって国内のスポーツ省でのステータスが上がり、それに伴って支援が受けられるようになるためである（阿部、2003）。

そこで本調査に協力していただいたハンガリー剣道連盟を例に具体的に説明したい。以下はハンガリーナショナルチーム監督である阿部氏のインタビュー等によるものである。

ハンガリーでは、スポーツ省に公認された国内スポーツ連盟は、すべてスポーツ法規で定められた基準に従ってランク付けがなされる。そのランク付けは以下のとおりである。

Aランク：オリンピック種目になっているスポーツ種目の連盟



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7

表1 第20回ヨーロッパ剣道選手権大会の昇段審査結果

	受験者(人)	合格者(人)	合格率(%)
初段	24	17	70.8
二段	28	21	75.0
三段	12	1	8.3
四段	16	2	12.5
五段	19	2	10.5
六段	27	3	11.1
七段	9	0	0.0
計	135	46	34.1

Bランク：国際連盟がGAISFに加盟しているスポーツ種目の連盟

Cランク：それ以外のスポーツ種目の連盟

つまり、クラスごとに国からの支援が異なり、ハンガリー剣道連盟はCランクに入ることから、その活動資金は困窮している。ちなみにヨーロッパでもっとも活動が充実しているフランス剣道連盟は、GAISFに加盟している柔道の下部組織として登録されている。したがって、国が各連盟への支援を緊縮した場合、下位ランクに属するクラブや連盟は活動の継続が不可能となる。とりわけヨーロッパの西側諸国に比べ、東側諸国においては高い納税が義務付けられており、国からの支援を

得ることができるかがその活動の死活問題となる。ハンガリー剣道連盟の中心的存在である阿部氏が行なっているクラブは決して広いとはいえない学校の体育館を借りて稽古を行なっている（写真8・9・10）が、その活動費も国の支援なしでは行なえないのが現状である。しかし、写真のとおり、その活動は地道であるものの、草の根的に普及しているヨーロッパ剣道界を支える重要な基礎的活動である。本調査にあたって阿部氏のクラブを参観したが、広いとはいえない体育館を有段

者から初心者まで約70名で利用し、限られた時間の中で効率的に指導を行っていたのが印象的であった。

以上のことから、剣道の国際的な普及を考える際、ヨーロッパスポーツにおける剣道の地位向上に関わる問題を解決することが求められる。その方略として考える点を以下に示す。

- ・IKFのGAISFへの加盟
- ・中長期的な全剣連の支援とさらなる国外活動への理解
- ・国際的な人事交流
- ・全剣連の国際普及活動にともなう重点拠点と課題の決定



写真 8



写真 9



写真 10

Ⅳ. ヨーロッパ剣道愛好者の意識調査

1. 調査方法

1) 期日・対象

調査は、2005年4月から10月にかけて実施した。被調査者は、スイスの剣道クラブに所属する有段者10名（男性10名）、フランス27名（男性20名、女性7名）で、そのうち有効回答は37通（100%）であった（表2）。

表2 被調査者の年齢

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
スイス	0	3	4	2	0	1	10
フランス	2	7	12	5	1	0	27

（単位：人）

2) 調査票の作成

調査票は、性別、年齢、剣道を始めた年齢、指導者としての経験年数、指導者としての立場といった被調査者の属性のほかに、日本とヨーロッパ剣道の考え方や指導方法の差異に関する意識、初心者指導の内容、そして初心者を指導するときに重視する指導観について調査した。フランス語、英語訳にあたっては、在留邦人で剣道経験者に依頼した。

3) 統計処理

本研究における統計解析の手続きは、SPSS 11.0J for Windowsにより行なった。

2. 調査結果

1) 指導者の特徴

表3は被調査者が剣道を始めた年齢、表4は指

表3 剣道の開始年齢

	10代	20代	30代	40代	計
スイス	2	6	2	0	10
フランス	5	11	9	2	27

（単位：人）

表4 指導者経験年数

	1年未満	1～5年	5～10年	10～15年	15～20年	20年以上	計
スイス	3	2	0	2	0	3	10
フランス	5	7	5	2	5	0	24

表5 被調査者の修得段位

	二段	三段	四段	五段	六段	七段	計
スイス	2	5	1	1	1	0	10
フランス	0	12	9	2	3	1	27

(単位 人)

導者としての経験年数、表5は被調査者の現在の段位を示している。表から、指導者としての経験年数が浅く、段位も3段から4段が最も多いことがわかった。フランスはヨーロッパの中でも組織、活動ともに最も優れた連盟である。そのような連盟でも指導者の経験年数が15年から20年は5名であり、段位も6段が3名、7段が1名であった。また、被調査者の多くはクラブのコーチであった。このことから、ヨーロッパにおいて剣道の質的拡大や各クラブにおいて効果的な指導を行なうためには、剣道指導者の育成が重要な課題と考えられる。

2) ヨーロッパ愛好者からみた指導方法に関する日本との比較

「日本とヨーロッパ各国の剣道の考え方や指導方法に差異があるか」の質問に対し、スイスの被調査者全員が「ある」と答え、フランスの被調査者は27名中15名が「ある」と答えている。そこで、「差異がある」と回答した被調査者が具体的にどのような点で差異があると感じているのか質問したところ、「試合や互角稽古をする楽しさを重視している」、「練習方法がバラエティーに富んでいる」、「健康のために行なうことを重視している」において、スイス、フランスともに高い値を示し、「競技志向である」の項目が低い値を示した(表6)。この結果から「楽しさ」と「健康」のキーワードが導かれ、ヨーロッパ愛好者は日本に比べ

生涯スポーツとしての剣道を享受していると考えられる。また、「礼儀」や「伝統」といった剣道を象徴する項目の値が低かったことも特徴であろう。

3) 初心者への指導方法と指導観

「剣道の初心者に指導する内容」を尋ねたところ、ほとんどの被調査者が「基本動作」と答えた。杉山ら(2004)によると、フランスの柔道連盟には独自の指導教本「フランスにおける柔道の教授方法」が存在し、初心者指導の活動の実態も基本動作はもちろんであるが、それに加え投げの指導を行なっていることが明らかとなっている。しかし、剣道に限ってはそのような傾向は見られず、多くは日本と同様の方法で行なわれているといえる。つまり、ヨーロッパにおける剣道は、全剣連の短期巡回講習会や長期の日本人指導員による指導、在留邦人で剣道経験者の指導が強く影響しており、柔道のようなオリンピック種目とは異なる普及過程があると推察できる。

そこで、「初心者指導のときに重視する点」について回答を求めた。表7はその結果を示している。その結果、「立派な剣道選手にすること」、「礼儀正しい態度を身につけさせること」、「しかけ技や応じ技などの技術を習得させること」、「構え、間合い、素振りなどの基本を正しく習得させること」といった項目が高い値を示した。一方、「試合に出場させること」、「健康の増進や体力を

表6 ヨーロッパ剣道愛好者からみた指導方法に関する日本との比較

質問項目	スイス		フランス	
	頻度(人)	割合(%)	頻度(人)	割合(%)
1 礼儀を重んじている	0	0.0	2	13.3
2 構えや素振りといった基本動作を重視している	5	50.0	4	26.7
3 試合や互格稽古をする楽しさを重視している	7	70.0	10	66.7
4 合理的な練習を行っている	0	0.0	5	33.3
5 体格や年齢などの特性に合った幅広い指導を行っている	8	80.0	7	46.7
6 武道としての伝統を重んじている	0	0.0	2	13.3
7 練習方法がバラエティーに富んでいる	5	50.0	6	40.0
8 少年期をモチベーションを与えるための重要な時期と捉えて指導している	3	30.0	3	20.0
9 競技志向である	0	0.0	3	20.0
10 試合形式の実践的な練習が多い	0	0.0	1	6.7
11 教育者と形容するにふさわしい指導者が多い	3	30.0	2	13.3
12 健康のために行うことを重視している	6	60.0	6	40.0
13 その他	1	10.0	3	20.0

表7 ヨーロッパ剣道愛好者の指導観

質問項目	全体		スイス		フランス	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1 立派な剣道選手にすること	4.66	0.68	4.89	0.33	4.58	0.15
2 向上心を高めること	4.44	0.50	4.11	0.33	4.56	0.10
3 試合に出場させること	2.79	1.01	2.63	1.19	2.85	0.19
4 健康の増進や体力を向上させること	3.69	0.83	3.67	0.50	3.69	0.18
5 よい友だちをつくること	3.61	1.09	3.63	0.92	3.60	0.23
6 休日を楽しく過ごさせること	3.12	1.32	3.78	0.67	2.88	0.28
7 試合に勝つ楽しさを味わわせること	2.65	1.12	2.63	1.41	2.65	0.21
8 礼儀正しい態度を身につけさせること	4.47	0.51	4.56	0.53	4.44	0.10
9 しかけ技や応じ技などの技術を習得させること	4.49	0.74	4.63	0.52	4.44	0.15
10 構え、間合い、素振りなどの基本を正しく習得させること	4.94	0.23	5.00	0.00	4.93	0.05

向上させること」、「休日を楽しく過ごさせること」、「試合に勝つ楽しさを味合わせること」の項目で低い値を示した。これらは、先述した「2）ヨーロッパ愛好者からみた指導方法に関する日本との比較」と異なる結果となった。つまり、初心者を指導する際は、「楽しさ」や「健康」より「礼儀」、「伝統」、「剣道の基礎基本」を重視しているということである。このような傾向はわが国と同様であるといえ、ヨーロッパの剣道指導者は伝統性に根ざした剣道に憧れや評価を行なっていると考えられる。

V. ま と め

わが国の運動文化である剣道は国際的に普及を遂げている。とりわけヨーロッパでは、第20回ヨーロッパ剣道選手権大会を盛大に開催するなど、各国の会員数が急増している。しかし、IKFがGAISFに加盟を否決されたことは、国際的普及に大きなマイナスの影響を及ぼしているといえる。それは、GAISFにIKFが加盟することによって各国の支援を保障しようとするものであったからである。地道に活動しているヨーロッパの剣道クラブは、制度的な問題でその活動の継続を脅かす局面を迎えており、その解決が急務である。

一方、指導者の立場にある剣道愛好者の意識調査を行なったところ、全剣連の短期巡回講習会や長期の日本人指導員による指導、在留邦人で剣道経験者の指導が強く影響していたことがわかり、剣道が日本からの輸入スポーツという印象を受け

た。また、組織の未成熟さや指導者不足も明らかとなった。これらは当然の結果であり、今後、ヨーロッパにおいて剣道の量的質的拡大を目指すのであれば、全剣連を中心とした支援や牽引が必要となるといえる。これまでもヨーロッパは日本からの技術指導者、現地で指導にあたる日本人指導者の連携によって、技術・組織的拡大を行なってきた（阿部、2003）。しかしながら一方で、全剣連、青年海外協力隊の指導者、個人的関係による指導者といった多様な方面からの支援によって普及されてきたのも現実である。また、このことによるトラブルも多く、個人や公的組織のさらなる連携が求められている（阿部、2003）。

以上のことから、ヨーロッパの剣道界は、その普及過程に過渡期を迎えており、今後さらなる普及を企図するには日本から単に人的・物的支援を続けるのではなく、中・長期的なプランのもと、組織的に行なうことが求められるといえる。

追記として、IKFがGAISFに加盟しなければならないもう一つの理由は、IKFが国際的な統括団体として認められる必要があったことを付け加えておきたい。現在、IKFではない国際組織を自称する別の組織が世界の剣道でイニシアティブをとるためにGAISFに加盟しようとする動きがあるといわれている。少なからず、ヨーロッパにおいてはGAISFに認められた団体が世界唯一の団体であり、それに加盟していない連盟は国からの支援を受けられないという事実がある。韓国ではIKFに加盟し唯一政府機関から承認を受けている大韓剣道会のほかに、世界剣道連盟が設立されている。



写真 11



写真 12

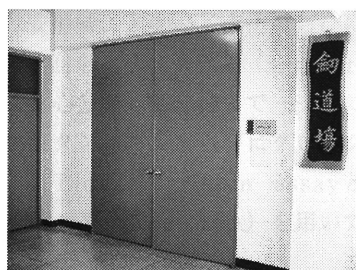


写真 13

世界剣道連盟は韓国剣道連盟を母体に作られ、アメリカを中心に各国に支部を設立し活動している。このことが直ちに「世界主流」となるとはいえないが、見過ごすことのできない動向である。龍仁大学剣道部監督の金氏へインタビューを行なったところ、韓国の剣道は移入過程の問題から、蹲踞の禁止や腰板のない袴の着用など様式に違いがみられるとのことであった（写真11・12・13）。しかし、今後はまず試合や稽古から交流を持ちたいとも述べていた。剣道の国際的普及を検討するためには、第一にアジアにおける相互理解からなる国際的連盟の確立が必要となるだろう。

最後に、本調査を行なうにあたり、調査の労をいただいたハンガリー剣道連盟阿部氏、スイス剣道連盟伊藤氏、フランス剣道連盟好村氏に衷心より感謝の意を表したい。

本研究は国士舘大学体育学部附属体育研究所の平成17年度研究助成により行なったものである。

引用・参考文献

- 1) 阿部哲史（2003）欧州から見た剣道の国際化．剣道日本28(11)：52-58.
- 2) 阿部哲史（2005）ハンガリーであった2つのニュースと、そこから考える国際化の行方．剣道日本30(6)：64-65.
- 3) 平川信夫（1997）剣道の国際化に関する研究．明治大学人文科学研究所紀要42：84-144
- 4) 剣道調査局レポート（2005）国際化への第一歩は早くも足踏み!?. 剣道日本30(7)：148-149.
- 5) 村田直樹（2005）国際化時代の今だからこそ、武道の教育的価値を問う．体育科教育53(11)：14-17.
- 6) 太田昌孝・杉山重利・福ヶ迫善彦（2005）ヨーロッパ諸国における剣道実践者の継続要因に関する検討—特に、フランス、スイス、ハンガリーを対象として—．体育・スポーツ科学研究5：25-29.
- 7) 太田順康・竹田隆一（2002）剣道の国際化に関する一考察．大阪教育大学紀要50(2)：473-486
- 8) 杉山重利・小山泰文・福ヶ迫善彦（2004）フランスにおける柔道指導者の指導方法と指導観に関する検討．国士舘大学体育研究所報23：29-34.
- 9) 和久貴洋（2003）「世界の剣道」になるための戦略．剣道日本28(11)：46-49.
- 10) 好村兼一（2003）世界に「生涯剣道」が根付いて欲しい．剣道日本28(11)：50-51.
- 11) 好村兼一（2005）国際化のためにも見直したい剣道での礼法と所作の意義．剣道日本30(4)：46-47.